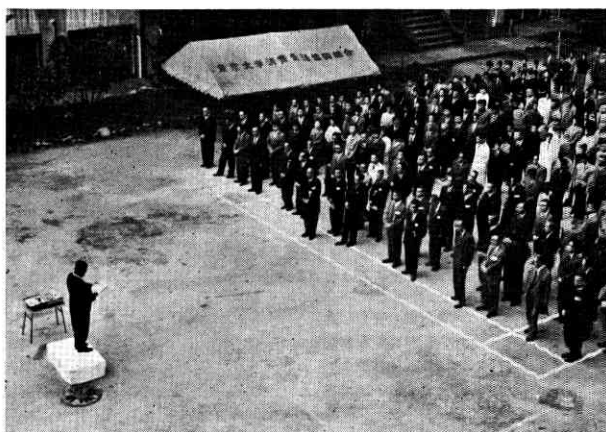


# 東京移転記念披露

と

## 所内公開の記録

記念行事実行委員会



所長の祝辞 東側中庭にて（11月8日）

東京移転のことについては、本誌昭和 37 年 5 月号に本所所長が「東京移転について」と題してその趣旨や経過について述べていられる。生産技術研究所の東京移転は、昨年その一部の施設を除いてほぼ完了し、麻布庁舎では五つの研究部と事務部とが業務を開始した。この移転の完成は 38 年度以降にも続けられるが、これを機会に関係機関の代表者ならびに縁故の深い方々に移転を披露し、あわせて本所の恒例となっている研究所公開が行なわれたのである。行事は昨年 11 月 8 日から 3 日間にわたって行なわれたので、以下にその概況を記しておきたいと思う。

### 1. この行事の意義

昭和 37 年は、回顧すれば東京大学第二工学部創立 20 年、生産技術研究所創設 13 年に加えて本所外郭団体(財団法人生産技術研究奨励会)の設立まさに 10 年にあたるのである。さらにこれに移転のことが加わって本所の沿革史上に記録されるべき年であったこと、ならびに研究所公開は昭和 34 年の本所創立 10 周年の行事以来のことなどから考えると、実施の理由が多かったことである。

### 2. 準備

昭和 37 年 7 月、本所常務委員会で移転披露行事を秋に実施する旨決まり、引き続いて 7 月、準備委員会、10 月、実行委員会が設けられた。委員会には前者に山本寛教授、後者に高橋武雄教授が所長の委嘱を受け、両委員会にはそれぞれ招待関係と行事関係の小委員会（前者は

招待者祝賀パーティ（11月8日）

満員の講演・映画の会場

生産技術研究奨励会の総会（11月8日）



加藤正夫教授と星埜和教授、後者は富永五郎助教授と一色貞文教授がそれぞれの小委員長)が設けられて企画と実施の万端にあたった。行事は前述の趣旨から移転披露と研究所公開とに主点がおかれたが、移転新築披露は落成ではないので、なるべく質素に行ない、研究所公開に主眼をおく方針で計画した。また生産技術研究奨励会の秋の総会を第 1 日に開催して、この会の役員・賛助員への披露もあわせて考えられた。その他公開日である 9 日、10 日の両日は、所員の学術講演の催しと、研究成果の一端をあらわす映画も上映することに決まったのである。

### 3. 実施の概況

11 月 8 日(木曜日)第 1 日は移転披露に主点のおかれた日で、午前 10 時半庁舎中庭で藤高所長の職員全員に対するあいさつがあり、また 11 時、奨励会の総会を開催し、午後は、本学を初め関係官公署代表者・財団関係者等を来賓とする茶会と研究公開を行なった。

9 日(金曜日)第 2 日は、大学・官公庁・産業界の技術関係者等をおもな対象とした研究所公開日とした

10 日(土曜日)第 3 日は、一般公開としたが、庁舎の狭い点から一般公開は大学学生以上の各界各層の人々にあらかじめポスター等で周知した。その結果、本行事を通じて参観者総人員は 2,520 人で、うち茶会出席者は 360 人と記録された。この 3 日間の天候は好晴な秋日和とはいえなかったが、たいした雨もなし幸いであった。

本所ではこれまで数種の刊行物を出しているが、そのうち PR 用として編集する「東大生研案内」1962 年版

公開題目

順番号	題 目	部 名	担 当 者
1	黒鉛の抵抗ろうづけ	II・III	安藤 良夫 沢井善三郎 橋 藤雄
2	巻取機の張力制御	III	沢井善三郎
3	各種高速度写真装置	II	植村 恒義
4	数値制御位置決め	II	大島康次郎
5	油圧トルク増幅器	II	大島康次郎
6	ステップモータを利用したテープリータ	II	大島康次郎
7	研削におけるびり振動の研究	II	亙理 厚
8	抵抗焼結に関する研究	IV	原 善四郎
9	真空焼鈍炉	IV	西川 精一
10	中性子発生装置	I	富永 五郎
11	振動実験装置	I	岡本 舜三
12	軽構造物の試験	I	森 大吉郎
13	薄板試験設備	I	山田 嘉昭
14	心無し研削法に関する研究	II	小川 正義
15	バレル研摩に関する研究	II	松永 正久
16	切削剤のジェット式供給法実験装置	II	竹中 規雄
17	精密圧延機	II	鈴木 弘
18	黒鉛の真空ろうづけ	II・III	安藤 良夫 沢井善三郎 橋 藤雄
19	船舶の浸水実験	II	田宮 真
20	高応力疲れ試験	II	高橋 幸伯
21	水圧衝撃試験	II	高橋 幸伯
22	低密度風洞	I	玉木 章夫
23	コンクリート用軽量骨材の研究	V	小林 一輔
24	高張力異形鉄筋の研究	V	小林 一輔
25	オリンピック屋内外水泳場	V	坪井 善勝
26	建築用パネル試験	V	田中 尚
27	発電所付属水路の模型試験	V	井口 昌平
28	写真測量図化	V	丸安 隆和
29	アスファルト三軸試験	V	星 楚 和
30	京葉工業地帯の地盤構造	V	三木五三郎
31	床版実験	V	久保慶三郎
32	超高真空に関する研究	I	富永 五郎
33	ロケット・エンジンの研究	I	秋葉鏡二郎
34	X線回折装置	I	一色 貞文
35	摩擦型抵抗線歪計	I	大井光四郎
36	油圧伝動装置	II	石原 智男
37	磁気増幅器シミュレータ	III	沢井善三郎
38	共振型疲労試験機	III	沢井善三郎
39	エビタクシャル・トランジスタのVHF/UHF 特性	III	安達 芳夫
40	急峻波頭インパルス	III	河村 達雄
41	アナログ電子計算機	II	野村 民也

順番号	題 目	部 名	担 当 者
42	多孔質体の細孔分布に関する研究	IV	福田 義民
43	傾斜管型抽出装置	IV	山本 寛
44	BET 表面積測定装置	IV	河添邦太郎
45	鉄鉱石の還元の研究	IV	雀部 高雄
46	金属の顕微鏡組織の研究	IV	西川 精一
47	汚損湿潤閃絡試験室	III	藤高 周平 達雄 河村 達雄
48	特別高気圧放電試験装置	III	藤高 周平 達雄
49	材料試験機	I	大井光四郎
50	歪計の衝撃追隨性	I	大井光四郎
51	音響実験	V	石井 聖光
52	サッシュ実験	V	勝田 高司
53	テロメリゼーションの研究	IV	浅原 照三
54	でんぷん糖化装置	IV	中村 亦夫
55	沸騰に関する実験	II	橋 藤雄
56	潤滑油剤に関する研究	II	松永 正久
57	指の機能	II	森 政弘
58	圧磁歪歪ジャイレタ	III	尾上 守夫
59	超音波遅延回路	III	尾上 守夫
60	交流ポーラログラフの研究	IV	高橋 義雄
61	有機過酸化物のポーラログラフ的研究	IV	早野 茂夫
62	分析用諸機器	IV	武藤 義一
63	イオン交換膜を用いた電解透析の研究	IV	山辺 武郎
64	波辺	I	波辺 勝
65	技術史研究室	V	村松貞次郎
66	モジュラーコーディネーション	V	池辺 陽
67	軽量パネルの性能実験	V	星野 昌一
68	レスポンス函数の測定機	I	久保田 広 小瀬 輝次
69	ジオン化合物のポーラログラフ的研究	IV	菊池 真一
70	低照度写真材料の感度測定の研究	IV	菊池 真一
71	電子写真の研究	IV	菊池 真一
72	異価分配反応の研究	IV	野崎 正弘
73	電子顕微鏡	II	松永 正久
74	メカノケミカル系	II	森 政弘
75	波高分析器	III	森脇 義雄
76	ミリ波伝送測定器	III	黒川 兼行
77	電子ビーム雑音測定装置	III	斎藤 成文
78	レーザー装置	III	斎藤 成文
79	ドリフト・トランジスタ及びエサキダイオードの接合容量	III	後川 昭雄
80	非破壊検査	III	高木 昇
81	観測ロケットのエレクトロニクス	III	高木 昇
82	連続式アルカリ融解反応装置	IV	永井 芳男 後藤 信行
83	動水腐食装置	IV	加藤 正夫

研究室公開（中性子発生装置）

研究室公開（潤滑油剤に関する研究）



を「移転記念号」としてこの機に合わせて刊行し、一般来賓に贈呈した。

学術講演は各研究部から1名ずつ、計5題目が講演され、映画は次掲のように4点が上映された。

会場は本所第1会議室を使用した。各講演・映画とも会場の定席 200 人に対し満員の来場者があった。

麻布庁舎は4層楼で、公開研究事項はその各階と屋外施設にわたり、前掲のように83課題が公開され、その歩行延キロ程は2km強にもなった。つぎに講演・映画の日程を掲げる。

**講演・映画日程**

**11月9日(金)**

10時30分より 映画「最近のカッパ・ロケット」

「試験溶鉱炉」

「人工内臓」

13時30分より 講演「新しい道路構築材料について」教授 野崎 弘

「窓・壁・カーテンウォール」

教授 勝田 高司

「瞬間の世界」

助教授 植村 恒義

15時30分より 映画「高速度写真」

**11月10日(土)**

10時30分より 映画「試験溶鉱炉」

「人工内臓」

13時30分より 講演「最近の宇宙の話題」

教授 糸川 英夫

「宇宙のエレクトロニクス」

教授 齊藤 成文

14時50分より 映画「最近のカッパ・ロケット」

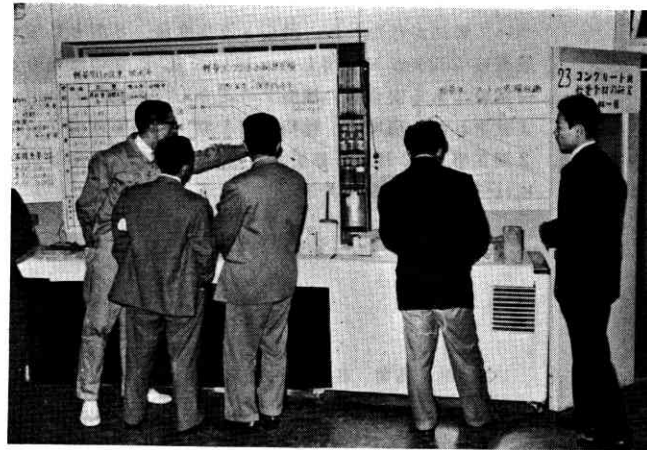
「高速度写真」

**4. むすび**

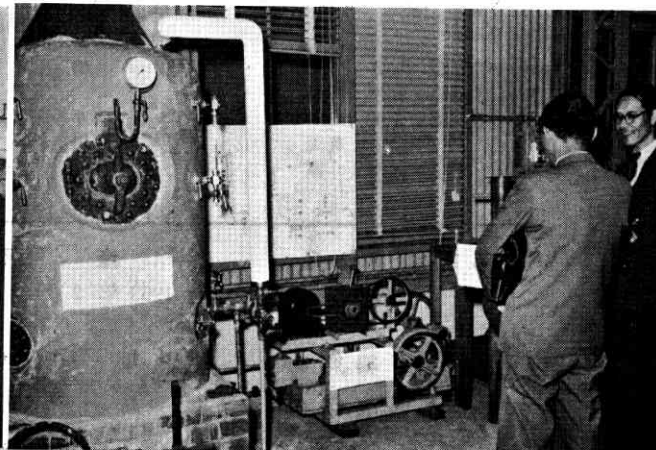
本所のように多数の研究分野を持つ研究の公開を同時に行なって、研究紹介の目的を一挙に達しようとする事は、あるいは無理であったかもしれない。参観者の中には広く全般的に見ようとされる方があり、それらの方は全公開を一巡するには小一日を要したわけである。また特別にある分野だけを見学される方を想定して、各研究部単位で専門別の見学コースも用意したが、庁舎内の部割りが階割りでなく縦割りであるため巡りにくかったこともあった。庁舎内は昨今本所職員でさえようやく各研究室の位置を覚え終わったくらいであるから、初めての参観者には迷路を歩むような思いをさせたのではないかといろいろ気づかったわけである。

しかし、生研としては前述のように最近3年目の研究公開で、新研究・新施設を紹介できたよい機会であった。この催しが所外の方々への認識を深め、本所職員にとっても研究運営上よき参考となったことは予想外に大であったのである。(1962. 12. 4 下村潤二郎記)

研究室公開 (コンクリート用軽量骨材の研究)



研究室公開 (でんぶん糖化装置)



研究室公開 (ミリ波伝送測定器)

